乳児期からの親の支援充実を改めて願う

幼児期の同じ年齢の自閉症児を育てている親であっても、親の異なる意識情報に、時を同じくしてメールで接した。

一つは、通園施設にボランティアで出入りしているメル友からで、入園したばかりの子どもが、みんなでの体操に入らずウロウロしているのを見て、親は「これ終わったら帰るからね！やりたくないから混ざらないんでしょ！○○（注：園の名前）、嫌いなんでしょ！」と子どもに言っていたという。

もう一方は、保育所に通う子どもの親からのメールで、「ハプニングやトラブルも、地域の皆さんに知ってもらい、交流するきっかけぐらいに思って、そこから係わり合いを育める様にするためにも、自身の器量も問われているなと。そして、親に出来る事があるとしたら、それが最高のプレゼントかなとも思います。」とあった。

自閉症の我が子を育てた親から、その体験から「初めて出会うプロによって、親子の将来のＱＯＬは決まる。」と云われたことがある。
その時に、親の意識・姿勢が、日々の子どもとの係わり合い方に大きく影響することは容易に推測できるので、「出会うプロ以前に、出会う親によって、子どもの将来のＱＯＬは決まるのでないか。」と返事したことを思い出した。

ボランティアのメル友は、「きっと、その子も半年後にはみんなと慣れて、体操だって他の子のお手本になっちゃうくらい成長するんだろうな～。
その姿を見たら、お母さん感動するんだろうな～と一人想像していました。
卒園式でのお母さん達の『ここに通って、自分の子どもがいとおしく思えるようになりました』ということばが印象に残っています。
○○は、障害をまだ受容していないお母さんもいるので、そのサポートも重要ですよね。」とあった。

確かに、「出会う親」が、早い時期から親に寄り添い続けてくれる「出会うプロ」によって育ち、子どもと共に将来のＱＯＬに向けて歩み出して欲しいものである。
それだけに、プロの責務が大きく、親子の人生を左右しかねないという謙虚さも必要となる。

自分は現職時代に、「乳児教室」をＤｒと開設し、退職まで７年間携わった体験の中で、「子どもがいとおしく思えるようになった」というような親の意識の変容を多く聞いてきた。
それだけに、乳児期からの親の支援体制・内容充実を改めて願わざるを得ない、対照的な親の意識情報であった。

阿部幸泰　　（2007 年 1 月 17 日　記）